

兵庫県将来構想研究会 第9回会議 (2020. 7. 27) 要旨

【議題】 社会潮流 テーマ別検討④ (自律分散型の地域構造)

(地勢をベースにした地域政策の必要性)

- ・ 県土は流域でできている。地形は私たちがどんな営みを展開しようと変えることができない素地だ。分散型の地域構造を考える前提として、もっと素直に「地勢」を見る視点が大切だ。
- ・ 年々放棄される山林田畑が増える中、局所的短時間豪雨が頻発化しており、自然災害のリスクが増大している。流域単位で地域の問題を考えることがますます重要になってきている。
- ・ 地勢単位に地域の問題を考えるときの課題は、行政の縦割りをどう乗り越えるか。また、情報の融合と可視化も必要。特に空から見る視点が重要で、ドローンを使いこなす必要がある。

(分散型の地域構造をめざす意義)

- ・ 兵庫が「分散」に取り組む意義は、五国からなる県だから。多様だからこそ、様々なニーズに対応できる県になれる。地域の個性を維持していくためにも、分散型をめざす必要がある。
- ・ 好きなところに住み、仕事も教育もリモートで全部解決、とはいかないものだ。人は地方に行けと行って行くものではないし、集まらないと不便なこともあれば、散らばったままでできることもある。一律集中、一律分散ではなく、ケースバイケースで考えなければならない。

(多自然地域に人が住み続けることの意味)

- ・ 人口が減って集落から人がいなくなると、自然が回復し、生物多様性が豊かになる、と考えるのは間違い。特に兵庫県のように鳥獣害がある地域では60年経っても荒れ地が続くだけだ。
- ・ 文化的景観は、土地・建物だけでなく、そこに住む人の営みも含めて保護しないと守れない。人がいなくなれば消失してしまう生きた文化財を守っていくという視点も大事だ。
- ・ スイスで山奥に人が住み続けられるのは、下流で高く上流で安い税制の存在が大きい。地方交付税とは違う仕組みが必要で、もっと狭い範囲で税金をプールして中で回す形が望ましい。
- ・ 農地の維持は、国土や景観、自然環境、文化の保全に不可欠。高付加価値化をめざすよりは、できるだけ育てやすい作物を低コストで大量生産する方が面的に農地を維持しやすい。

(都市の居心地はこれからどんどんよくなる)

- ・ 都心に緑地やオープンスペースが再整備され、都市中心部の居心地が良くなっていくだろう。密な都心から外に出ようとする動きが弱まり、地方回帰が難しくなるのではないか。
- ・ サードプレイス、仮想空間のフォースプレイスに次いで最近出てきた考え方が、ネイバーフッドプレイス。自宅周辺のガーデンやパークの居心地の良さの重要性に皆が気付き始めた。
- ・ 道路の占用許可を緩和する動きや、ウォークアブルシティ (歩いて暮らせる街)、自動車から自転車への政策転換が国内外で進んでいる。これらの動きが今後加速していくだろう。
- ・ タクティカル・アーバニズムの考え方を生かすべき。車道を屋外カフェに変えるといった市民中心の社会実験を繰り返し、都市の新たなデザインやマネジメントの仕組みを作り出し、そこから新たな産業、雇用を生み出す動きだ。地方都市や多自然地域にも適用できる考え方だ。

(ニュータウンは相当のてこ入れが必要)

- ・ 成り行き任せではニュータウンの再生は進まない。相当のてこ入れが必要で、行政が入って計画的に維持・更新を進める必要がある。機能集約と自然再生も含めて考えないといけない。

(地方都市は個性化で生き残りを)

- ・ 地方都市は多自然地域のハブとして、既に都市的な機能は集約されつつある。問題は産業で、自治体新電力のような形で新たな産業を生み出していく必要がある。それぞれの都市が個性化し、全体として多様な居住様式が展開されている状況になるのが望ましい。

(コンパクト化は既にできている)

- ・ 国が考えるコンパクト化は絵に描いた餅。コンパクトにできるところはもうしている。集落は非常にコンパクト。川沿いの街とそこにつながる集落の連携は見事で、最短距離の道と土地利用と水の管理がセットになり、連続している。流域ごとに既にコンパクトになっている。

(田舎のベッドタウン化はめざす姿ではない)

- ・ 勤め先は都心だがリモートワークなので住む場所は田舎という人を増やすのが田舎にとってよいことなのか。それは結局都市に依存した「田舎のベッドタウン化」ではないか。その地域を担っていく人々が住まないと、その地域を健全に維持し続けることはできないのではないか。

(地方分散を進めるために)

- ・ 人口の移動はフリーなので、都市から地方に移動させようとしても、都市より大きな魅力がなければ地方には行かない。地方の魅力をいかに発信するかがますます大きな問題になる。
- ・ 都市に人が集まるのは、地方だと仕事がないという不安感と、地方だと医療体制が整っていないという不安感からだ。地方分散を進めるためには、この不安感を取り除く必要がある。
- ・ その意味で大事なのは雇用。地方に雇用を生み出し、仕事の拠点自体が地方にあるという形にならない限り、やっぱり都心の方が住みやすくなって、都市に人が集まる流れは変わらないだろう。その地域の環境や資源から産業、雇用をいかに生み出すかが重要な課題になる。
- ・ 分散居住で大きな問題は医療。重症者の搬送体制を整える一方で、軽症者や高齢者は、ICTを活用して校区単位などで何かあったときの助け合いができる仕組みを作る必要がある。
- ・ 教育のオンデマンド化はこの機に進むだろう。医療も同様にリモート化を進めるべきだ。

(食料品アクセス困難地域の存在)

- ・ 農林水産省の食料品アクセス困難マップは衝撃的。県内に広く分布する食料品アクセス困難地域こそ、新しいアイデアやチャレンジが最も必要な地域ではないか。

(その地域ならではの住まい方のモデル化が必要)

- ・ ここなら東京に週1回通勤する働き方が可能といったことは可視化できるはず。このエリアならこんな働き方ができるといった幾つかのモデルを働く世代に提示できれば、兵庫県がどういう人をターゲットにしているのかがクリアになり、選ばれやすくなるはず。

(新しい住まい方を発明しよう)

- ・ 国土をどうするかアイデアがどこかにあるわけではない。どこかにあるものを持ってくる時代は終わった。私たちには、新しい住まい方を発明し、若い世代に伝えていく責任がある。
- ・ 仕事を選ぶと自動的に住む場所が決まる時代から、どういう場所に住み、どういう暮らしをしたいかを考えて、それに合った仕事を選ぶ時代になるかもしれない。ますます地域の魅力が問われる時代になるはずだし、そこにこそ自治体単位で知恵を出す意味がある。

(以上)